



同義的類似地名の分析：ホラ・フレ・ハル・ホロについて

吉田，茂樹

(Citation)

兵庫地理, 23:26-41

(Issue Date)

1978-04-30

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002301>



同義的類似地名の分析

— ホラ・フレ・ハル・ホロについて —

吉 田 茂 樹

1. 序

今日、なお問題となっている若干の地名名義について考察し、論者の見解を示しておきたい。特に類似性が高く、多様な解釈がなされ、地理上の分布が著しく偏在しているホラ（洞）・フレ（触）・ハル（原）・ホロ（畏・保呂）等の解釈を試みてみたい。

2. ホラ（洞）について

鏡味完二の分布図¹⁾でも知られるように、ホラ（洞）という接尾型を中心とする地名は、岐阜県下に著しく集中し、東北・東海・九州に散見される極めて偏在度の高い地名である。これに関して、鏡味は「水の少ない短小で奥詰りの谷^{2), 3)}」と地形的に解釈し、柳田国男も「ホラは谷または迫のことである⁴⁾」と、ほぼ同様に解釈している。松尾俊郎はこれらの地形説を批判しながら、「ホラ・ボラ（洞）はハラ・バラ（原）の転訛⁵⁾」とし、岐阜県下にある木知原（コチボラ）・木知洞が全く同じ呼び名の例であるとして、自説を補強されている。これら先学の解釈ももともとで、部分的には正しいのであるが、ホラ本来の解釈には不十分といわねばならない。ホラという地名が、その成立当初から今日まで一貫した名義ならば、すべての説は誤りとなろう。地名も人類の言葉であるから、大野晋が説かれるように⁶⁾、「語の意味は展開し変化する」のである。前説はすべて、その展開し変化する側の解釈であるといわねばならず、論者はホラの成立当初の名義は、もともと何であったかを考究してみたい。

ホラという地名は古代にはみえず、初見とおぼしきものの一つに『古事類苑』の美濃国の条にみえる「美濃国知行方目録⁷⁾」にある一連の集落名であろう。ここには、ホラを解釈する上で極めて興味ある地名の取扱いをしており、まず、これらを列挙してみよう。

「池田郡本郷・萩原・田中村・くつ井三ヶ村・段村・宮地村・かうじかいと・すなはた村・片山村・上野村・東野村・六井むら・青柳・田畑村・ふちしろたんなべう・山ほら・草深村・八幡村」（天正19年）

この中に「山ほら」がみえるが、第一に「洞」という漢字を用いていないこと、第二は他の多くは地名の語尾に「村」としてあるのに、「山ほら」のみで「村」を付加していないことである。このことは、ホラという地名の成立当初は、洞窟や谷間と関係する「洞」ではなく、ただ、後になって「洞」という当て字を用いたことが考えられよう。次に、何故「山ほら村」としなかったかである。前記の地名の中で、「村」のつかない「かうじがいと・山ほら・ふちしろたんなべう」は、すべて山麓のゆるやかな小扇状地面に立地する。これらは他の村に比して、やや水利が悪く、開発の新しい集落であることを意味している。「かうじがいと」のカイト（垣内）も、中世成立の新しい地名で、これに関して柳田は、「出村の如き小部落で小区画の地名⁸⁾」としており、当時の新しい開拓集落を意味する。この意味において、カイトもホラも村落の性格としては、ほとんど差異はなかろう。カイトとホラの呼び名が異なるのは、村作りの様式の差異でしかない。前者はある地域内での区画を定めての呼称であり、後者は単に荒野を開発してつくった呼称である。成立の新しいこれらの集落は、他の村に比して村落としての規模やまとまりが不十分な状態であったため、「村」が付加されなかったものと考えられるが、実は同時に、カイトもホラも村落そのものを意味している。「かうじがいと」を「かうじ（現名は小牛）村」の意として何等の不都合がなく、「山ほら」が「山村」であっても同様であろう。しかもこの「山ほら」は、山麓に近いとはいえ、平地立地型で、谷という地形には全く無関係であることを知らねばならない。（図1 参照）

このホラというのは、その多くは早くて中世中葉以後、近世に至るまで地名として命名（岐阜県下には新田洞という近世型の地名がある）され、それが美濃北部から飛騨の山地に多く分布する理由は、当初は先の「山ほら」や「前洞（岐阜市の地名で平坦地に立地）」のように、濃尾平野の中で比較的水利の悪い土地を開発して、ホラという呼称を用いていたが、次第に開発適地が乏しくなり、必然的に北部山地の谷間の小平地にホラという新村をつくるに至ったと考えられよう。そして後に、ホラを「洞」という文字で常用したため、岐阜県北部の小谷に「洞」が多く分布し、後世、奥地に入った開拓者が誤って谷の意とし、一部で方言化して、谷をホラと呼ぶに至ったと解されよう。くり返しいうが、「洞」なる地名は、なるほど小谷間に多いが、平地・台地・扇状地にも幾例もあり、当初の意義は谷に関係した地名ではあり得ないのである。

要するにホラというのは、古語のハル（開・墾）くの意をもつ語の地名化したもので、成立当初は新しく開発された小村としての村落の意をもとう。「山洞・

図1. 岐阜県の「山洞」の立地
(5万分の1地形図『大垣』より)

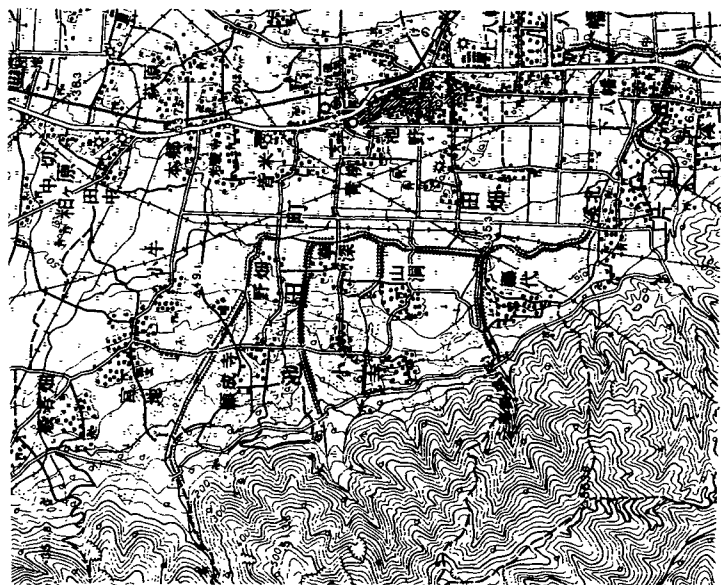
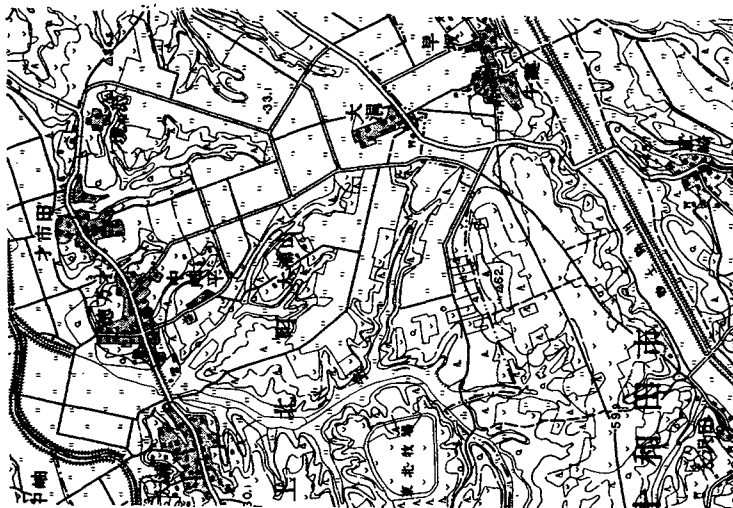


図2. 青森県の「大洞」の立地
(5万分の1地形図『七戸』より)



前洞・新田洞」というのは、「山谷・前谷・新田谷」ではなく、成立の新しい小村としての「山村・前村・新田村」の意であることは疑う余地はない。中世起源の「垣内・土居・要害」等の地名が、それほど内容に差異がみとめられないのに、ある程度の偏在分布を示すのは、一種の地域的流行語とみてよく、ホラはその最たるものとして受けとめられよう。後に述べる九州のハル（原）も、岐阜県下のホラ（洞）も、内容的には差異はなく、地域的な流行地名に過ぎない。

なお、松尾のいう「ホラ（洞）とハラ（原）は同源」という解釈であるが、一体、ここでの「ハラ」とは何であるかということである。論者は古代地名の「原」の使用例から、「バラ」には幾つかの異なった語源、乃至は系統があろうことを別稿で強調した⁹⁾。従って、「ハラ」を単なる原野とか平地の意で用いるならば、「ホラ」と「ハラ」は異質となる。「ハラ」の意が変化し、開発された所の小村としての意ならば、松尾のいう説が正しかろう。先の文献で示した集落名に「山ほら・萩原」があって、中世末期においても、「ホラ」と「ハラ」を区別している点を注目せねばならない。松尾の論拠とした岐阜県本巣町の木知原（コチボラ）¹⁰⁾は、『古事類苑』の「地勢提要」には「本巣郡木知原（コチハラ）村」と明記しており、「原」を「ホラ」とは呼んでいないのである。これもまた、後人の誤った呼び方であって、本来、「ホラ」と「ハラ」は異質であるとみたい。

以上によって、ホラはハル（開・壑）の流れをくみ、中世における新開地として誕生し、近世に至っては「新田洞・新開洞」の如く、最早、単に新開村とか新開地といった意味をもつ語に変化したのである。こうした中であって、奥地の住民が誤って谷の意とした地域が出現し、ホラの意が多様化していったとみるのが真実であろう。

3. フレ（触）について

周知のように、長崎県壱岐島にフレ（触）という地名が集中分布し、他地域にほとんどみられない特異な接尾型地名であるが、これに関して、しばしば、朝鮮語の「フリ・フル（村の意）」との関係が問題にされるようだが、朝鮮語の系統は別としても、村の意というのは、ある意味で正しい。

さて、このフレであるが、金沢庄三郎が『日鮮同祖論¹¹⁾』で「朝鮮の古語で村を por 又 ko-por といった。我国の古語にも村をフレという」とし、日本の地名に朝鮮語からきた「フリ・フレ・フル」が多からんことを主張された。たしかに、「フレ」とか「コホリ」などの語が朝鮮語と関係することは否定できない。金沢は壱岐の「触」には直接言及されないで、日本の古文献の地名で論じられたが、

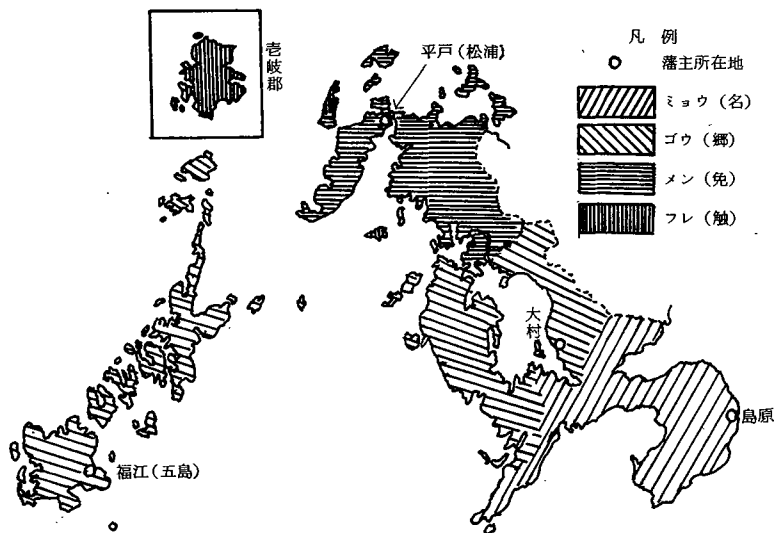
この影響で、壱岐の「触」が朝鮮系と考える向きがあることも否定できない。柳田は「名・籠・免と同じ区画の意としてフレ（触）と呼び、今の朝鮮語のプルから出たとは、あるいは言い過ぎかもしれないが、少くとも、フレ・プルは共通の語源を持つと言っている¹²⁾」と解している。論者は柳田の前半の区画の意に賛同しても、後半の朝鮮語との関連には賛同できない。鏡味完二は「東触・西触・北触・南触」など、壱岐の「触」の55%が方向を意味するから、方向に関係する語のように思うと、はっきりした解釈には至っていない¹³⁾。山口恵一郎も他説の引用を主としながらも、「フレはムラの意¹⁴⁾」としている。『日本地誌』¹⁵⁾によると、壱岐の「浦」集落と「触」集落の対比として、前者は漁村としての集村形態、後者は開拓農村としての散村形態をとるとし、集落地理学の立場で述べている。

以上の如く、地名としての「フレ」は朝鮮系の語かと思われる以外にはっきりしない。しかし、壱岐の「触」は、朝鮮系の地名とはまず考えられない。高句麗の「バル（原）」、新羅の「プル（火・伐）」、百済の「フリ（夫里）」は、『三国史記』¹⁶⁾に多用される村の意をもつ地名であるが、高句麗王朝の「原」は、金思燁の指摘や論者の考察から、当初は高句麗王朝の聖地として、陵地の地名に用い、後に大和朝廷が聖なる佳名として、皇室に関係する陵地・寺地や皇居の地名に「原」を用いた。従って、古代においては、朝鮮系と思われる「バル（原）」は大和地方に入って「ハラ（原）」として用いられ、原野という意でなく、聖地として開かれた所に命名された。この意味において、九州の「フレ（触）」や「ハル（原）」は、高句麗の「バル（原）」とは結びつかないのである。何故なら、第一に「バル・プル・フリ」が朝鮮からの渡来者によって九州に多くの地名を残したものなら、渡来者が多く来住した古墳時代から古代にかけての古地名でなければならないのに、「フレ（触）」は古文献に全くみえず、折茂順平の研究や浮田典良の発言で知られるように、近世に突如として出現する地名である。¹⁸⁾「ハル（原）」も後述するように、古代では「原」はハラであってハルではない。古代の渡来者が古代に全く用いず、近世に突如として用いることはほとんどあり得ず、「フレ・ハル」が古代渡来者の命名ではあり得ない。第二に「フレ」は肥前松浦藩の命名と考えられ、松浦藩の支配した長崎県壱岐島・生月島に限って集中的に用いていることである。しかも、旧郷名の下的小区画分割によって、「石田西触・芦辺南触」という用法が大半を占め、近世の新しい開拓地としての命名であることは疑う余地はない。日本において、中世から近世における墾田地もしくは新田村としての地名の命名には、他に一つとして渡来者に由来するものはなく、いずれも日本語地名である。この意味において、九州の「フレ（触）」は朝鮮語

ではあり得ない。また、朝鮮語の系統に由来するものでもない。

さて、このように新しい「触」が、村の意という程度で、何故「フレ」と呼んだかは、今もってわからない。そこで論者は、壱岐を支配した肥前松浦氏が、土地を分割した点を注目して、郷名を分割して小字にするための振り分けの「フリ」が「フレ」²⁰⁾となったと結論づけたい。「振り分く」とは「割りあてて分つ。分配する」²¹⁾の意であるから、土地の分割にも用いる語である。『日本図誌大系』も「壱岐は藩政期において、平戸島の松浦藩の領域で、耕作権が与えられ、10年ごとの地割の割替制度により、触はその割替の単位」²¹⁾としている。この論拠には、今一つの有力な手がかりがある。同じ松浦藩の支配地であった長崎県北松浦郡一帯には「何々免」と、地名の語尾に「メン（免）」を集中的に用いている。この「メン」は「田租を賦課する割合（『広辞苑』）」からきている。農地に田租を賦課するための土地の小区分名が「免」であり、同様の理由での振り分けが「触」であろう。問題は、何故松浦藩は「触・免」を用いたかである。この答えとして、

図3. 長崎県下の接尾型地名の分布



（注）本図と瀬野精一郎著『長崎県の歴史』p-193
（山川出版社）とを比較されたい。

図3がそれを語るであろう。対馬を除いて長崎県下の藩政時代には、島原藩がミョウ（名）、大村藩と五島藩がゴウ（郷）、松浦藩がメン（免）とフレ（触）を地名の語尾に用いており、この分布は藩領とはほぼ一致する。従ってこれらが藩の政策による命名であることは明白である。この「名・免・郷・触」という接尾型地名は他地域にもあるが、長崎県下の場合とはその意義がやや異なるものとみる必要であろう。しからば、松浦藩は何故「触・免」の二様の命名法を用いたのであろうか。この答えを明確には下し得ないが、おそらく地形の相異からくる土地利用上の問題であろう。壱岐島は台地状の地形で、中世までは農民が少なく大半が漁民であり、内陸に多くの未開発地を有していた。食糧増産に乗り出した松浦藩は、耕地の乏しい山がちな北松浦半島や平戸島より、開発の可能な壱岐内陸に着目して、郷村の細分割による振り分けによって小農村を増し、特別に「触」と呼ぶようになったのではあるまいか。

なお、鏡味いう「東触・西触」という方向に関する言葉が「触」ではないかという点であるが、これは考え過ぎであろう。基本的には柳田の考えが当を得よう。ついでながら述べると、地名に「東西南北」の方向を用いるのは、一般に新しい地名が多い。古代の地名では『和名抄』にわずか2例というように、古代では極めてその例が乏しい。中世以後、次第に増加し、近世に著しく多くなってくる。壱岐の「触」に方向を冠した地名が多いのは、近世に至って短期間で集中的に新村が生まれるような場合、「東西南北」を多用するものと考えられよう。

以上で知られるように、「触」は分割された小字名に多用され、その意味において小村としての村の意もあろうが、本来、村の意ではない。むしろ、「芦辺南触」という場合、「芦辺村南地区」の意であって、村というより、分割された地区という程度の意義をもとう。これによって、日本語の振り分くより派生したる語であって、朝鮮語の「フリ・フレ」の村の意とは何等関係しないことを強調したいのである。

4. ハル（原）について

九州から沖縄にかけて、「原」をハルと読む地名が多いことはよく知られるが、一般的には、原野としての「ハラ（原）」をハルと読み、また、「ハル（治る・墾る）」という語義に通じ、村落としての集落の意味ももつという考え方である。一方、金思燁のように、高句麗の「バル（原）」から直接きたがために、九州には「ハル」という高句麗系の地名が満ちあふれるという解釈もある。そこではたして、古代における「ハラ（原）」を、九州では「ハル」と呼んでいたであろう

か。古文獻から、その用例を示してみたい。

- | | | | |
|---|-----|---------|-------------|
| ① | 早 良 | (サハラ) | 筑前国早良郡<和名抄> |
| ② | 柞 原 | (クハラ) | 筑前国糟屋郡<同 上> |
| ③ | 御 原 | (ミハラ) | 筑後国御原郡<同 上> |
| ④ | 桑 原 | (クハハラ) | 筑後国上妻郡<同 上> |
| ⑤ | 葛 原 | (カツラハラ) | 豊前国宇佐郡<同 上> |
| ⑥ | 波 良 | (ハ ラ) | 肥後国阿蘇郡<同 上> |
| ⑦ | 桑 原 | (クハハラ) | 大隅国桑原郡<同 上> |
| ⑧ | 柏 原 | (カシハバラ) | 豊後国直入郡<風土記> |
| ⑨ | 原 野 | (ハラノ) | 豊後国大野郡<同 上> |
| ⑩ | 平 原 | (ハ ラ) | 肥前国佐嘉郡<同 上> |
| ⑪ | 篠 原 | (シノハラ) | 肥前国松浦郡<同 上> |
| ⑫ | 子負原 | (コフハラ) | 筑前国怡土郡<万葉集> |

以上の各例は、訓注等があって、はっきり、「ハラ」と呼べるものをあげたが、その他は省いてある。『和名抄』の場合、「原」はほとんど「ハラ」としており、わずかに1例、「原木(アラキ)」があるのみで、「原(ハル)」は見当たらない。しからば、古代の九州では「ハル」と呼ぶものにどのような地名があるかを示しておこう。

- | | | | |
|---|-----|--------|-------------|
| ① | 雲 須 | (クモハル) | 筑前国怡土郡<和名抄> |
| ② | 春 野 | (ハルノ) | 日向国諸県郡<同 上> |
| ③ | 鹿 春 | (カハル) | 豊前国田河郡<風土記> |

これで知られるように、「原」を用いず、「春・須」のみである。「須」をハルというのは「鋤・鉏・須支(スキ)」<新撰字鏡>によったと考えられ、土地を掘り起して耕やす意となる。古代における「ハル」は、九州においても、「ハル(墾)・ハル(開)く」であって、決して、草木の生える原野としての「原」でもなければ、平坦地を意味する「原」でもない。「原」は「ハラ」であって、「ハル」ではなく、「ハラ」と「ハル」は区別されていることを知らねばならない。

さて、一体どのあたりで「原」が「ハル」になったか。中世に下って、竹内理

23)
三編の『莊園分布図』から、九州の「ハラ」と「ハル」を列举してみたい。

- | | | | |
|---|---------|-----------|--------|
| ① | 吉 原 庄 | (ヨシハラ) | 筑前国糟屋郡 |
| ② | 桑 原 庄 | (クワハラ) | 筑前国志摩郡 |
| ③ | 三 原 庄 | (ミハラ) | 筑後国御原郡 |
| ④ | 櫛 原 庄 | (クシハラ) | 筑後国御井郡 |
| ⑤ | 宇 原 庄 | (ウハラ) | 豊前国京都郡 |
| ⑥ | 田 原 庄 | (タハラ) | 豊前国田河郡 |
| ⑦ | 田 原 別 符 | (タハラ) | 豊後国国崎郡 |
| ⑧ | 大田原別符 | (オオタハラ) | 豊後国国崎郡 |
| ⑨ | 藤 原 庄 | (フジワラ) | 豊後国速見郡 |
| ⑩ | 三 野 原 庄 | (ミノハラ) | 肥前国養父郡 |
| ⑪ | 野 原 庄 | (ノハラ) | 肥後国玉名郡 |
| ⑫ | 志 原 保 | (シハラ) | 壱岐国石田郡 |
| ⑬ | 広 原 庄 | (ヒロハラ) | 日向国那珂郡 |
| ⑭ | 柏 原 別 符 | (カシワバラ) | 日向国宮崎郡 |
| ⑮ | 小 原 別 符 | (オハラ) | 大隅国肝付郡 |

以上が「ハラ」と読むものであるが、何々原という場合は、すべて「ハラ」であって「ハル」は見あたらない。続いて「ハル」は、

- | | | | |
|---|-------|---------|--------|
| ① | 原 田 庄 | (ハルダ) | 筑前国御笠郡 |
| ② | 原 田 庄 | (ハルタ) | 筑後国三潯郡 |
| ③ | 晴 気 保 | (ハルケ) | 肥前国小城郡 |

というわずか三例であるが、ここに始めて「原」を「ハル」と呼んでいる。しかも、「ハルダ・ハルタ」という同系の地名のみである。これらが上記の何々原の「ハラ」とは異質であることは容易に察知できよう。この相異を更に理解されるために、九州以外での「ハル」を前記の資料から示してみよう。

- | | | | |
|---|---------|----------|--------|
| ① | 治 田 野 庄 | (ハルタノ) | 河内国錦部郡 |
| ② | 春 木 庄 | (ハルキ) | 和泉国和泉郡 |
| ③ | 治 田 厨 | (ハルタ) | 伊勢国員弁郡 |

- | | |
|----------------|--------|
| ④ 治 田 厨 (ハルタ) | 伊勢国三重郡 |
| ⑤ 春 近 庄 (ハルチカ) | 越前国坂井郡 |
| ⑥ 春 近 庄 (ハルチカ) | 美濃国席田郡 |

ここでも「ハル」というのは接頭型で、接尾型がみられず、九州の「原田（ハルタ）」と近畿の「治田（ハルタ）」²⁴⁾が同質であろうことは容易に察しがつく。九州において、中世に至って始めて、墾り田を「治田」でなく「原田」という当て字を用いはじめたのが、そもそも混乱の始まりであった。しかしながら、以上の分析によって、中央でいうところの「原」は中世に至っても、九州では「原」は「ハラ」であって、「ハル」とは呼ばれていないことが、最早理解し得たと思う。『大言海』を始めとして、多くの識者が、九州では「原」を「ハル」という誤った認識が先行して、遂には金思燁のいう高句麗系地名となって解釈されるのである。

さて、いよいよ、論をしめくりたいが、九州においては、近世に至って爆発的に「原」を「ハル」と呼ぶようになった。九州では山の急斜面に、単に「原（ハル）」という地名が少くないのであるが、これが、平地にある「桑原・田原」とは異質であり、本来、「治」か「開」という文字を使うべきものであろう。九州に多い「北原（キタバル）・新田原（シンデンバル）」という地名は、岐阜地方の「北洞・新田洞」と共通する命名で、成立の新しい地名としての地域的な命名法にすぎない。中には「久郎原（クロウハル）」＜筑後国下妻郡＞という人名を冠した地名もあり、この「ハル」も「原」ではなく「治」という開墾地の意味であろう。かように「ハル」に「原」を用い始めたため、中には、中世まで「桑原（クワハラ）・田原（タハラ）」と呼ばれていた地名までが、「クワハル・タバル」となって、もとから「原」を「ハル」と呼んでいたと誤ってきたのが真実であろう。かようにして、九州独特の「ハル」が誕生し、方言的地名として奇異に扱われ、様々な憶測が生まれてきたのである。これによって、九州の「ハル」は、「原（ハラ）」を「ハル」と誤って呼ぶ地名を除けば、古代・中世の「原」とも、朝鮮語の「バル（原）」とも直接関係のない、他の「洞・開・治・掘・名・丸」等と関連する、一種の開墾地名であるとの結論に達し得る。

5. ホロ（母衣・保呂・幌）について

鏡味完二は、東北地方に多い「ホロ」という地名が、「ホラ（洞）」²⁵⁾と共に谷沢に混在分布する状況をみて、「ホロ」と「ホラ」は同源とした。これに対し松

尾俊郎は、「ホロ」の立地が崖を伴う地形に集中するのに着目して、「ホロは崖という意味をもつ語に間違いあるまい」²⁶⁾としたが、結局、鏡味と同じように、「ホロはホラ・ボラにも通ずる」と解した。一方、金田一京助²⁷⁾及び山田秀三²⁸⁾は、東北地方に「ホロベツ（母衣別）・ホロナイ（保呂内）」という北海道に多い地名があるのに着目して、アイヌ語地名の「poro-pet（大きい川）・poro-nai（大きい川・沢）」であろうとした。しかし両者とも、東北地方の「ホロ」を、すべてアイヌ語地名とはせず、その一部についての解釈である。

さて、論者の解釈であるが、東北地方のアイヌ語地名については別に論じようが、「ホロ」に限って言えば、アイヌ語地名と日本語地名の両方が混在し、その多くは日本語地名であると考えている。まず、「ホロ」と「ホラ」の関係であるが、一部にそのような同源性があるにしても、多くは直接のつながりがないことを指摘しておきたい。第一に、「ホロ」は「母衣月・母衣岩・母衣野・母衣地・母衣下・保呂毛・母衣輪」という接頭型が多いのに対し、「ホラ」は東北地方の例でみても、「大洞・長洞・高洞・長者洞・熊ノ洞・朽洞」という接尾型がほとんどであること。第二に、一部に類似性があっても、第一の例で知られるように、「ホロ」と「ホラ」には類似の地名がほとんどないこと。鏡味完二は、岩手県の「母衣綿（ホロワタ）」が「洞和田」²⁹⁾であるとしているが、他はあまりにも似つかない地名である。類似性を強調されるなら、もっと多くの自然な類似地名が必要であろう。鏡味明克自身が、「アラマチ（荒町・新町）」の研究において、その類似性と分布から地名研究の方法論を指摘されたことがある。この論義があればこそ、論者は「ホロ」と「ホラ」の同源性に疑問をもつのである。第三に「ホロ」には「母衣下山・保呂羽山」等、急崖の山名があるのに対し、「ホラ」はほとんど谷間の小平地に立地し、中には、青森県上北町大洞（図2）のように、台地上の平地立地型もあることなどである。要するに、東北地方の「ホラ」も、先に論考した岐阜県の「ホラ」と同様に、地形的名称ではなく、開墾地名である。これに対して、「ホロ」は地形的名称であろうから、「ホラ」が「ホロ」ではあり得ない。

そこで論者の解釈であるが、「ホロ」の多くは「オロ」の転化と決定したい。「オロ」とは、「オロシ（下・瀛）」の「オロ」である。「オロシ・アラシ」については、すでに松尾が「崖地の意がある」³¹⁾としているが、何故か松尾は、「ホロ」も「オロシ」も崖に関係するとしながらも、「ホロ」は「オロ」ではなく「ホラ・ボラ」に通ずると解している。「ホロ」が「オロ」であるとすれば、「オロ」とは何かである。「オロ」は「オリ（折）」の転化とみることができる。「

「オリ（折）」という地名の名義には二通りあって、第一は、木が折れる、道筋が折れ曲るの「オリ」、第二は、山や島などが浸食され、けずられて崖になった所で、山地の一部がけずり落された所を「オリ」という。全国に分布する「折一」という地名の大半は第二の意であって、その多くは崖を伴う山谷に立地する。論者は、「オレ（折）る」と「オリ（下）る」は同源とみており、落下するの「オチ（落）る」も関係があろう。これを証する理由として、次の地名を例示しよう。

- ①下立（オリタチ）岐阜県加茂郡八百津町
折立（オリタチ）奈良県吉野郡十津川村
- ②下立（オリタテ）富山県下新川郡宇奈月町
折立（オリタテ）新潟県北魚沼郡湯之谷村
- ③下付（オリツキ）愛媛県上浮穴郡面河村
折付（オリツキ）山梨県南巨摩郡南部町

これらがすべて崖を伴う山谷に立地していることは言うまでもなく、この「折・下」は「オロ」とも呼ばれている。

- 下石町（オロシ）岐阜県土岐市
- 下石（オロジ）鳥取県気高郡気高町
- 折瀬崎（オロシ）長崎県壱岐郡郷ノ浦町
- 折瀬鼻（オロシ）佐賀県東松浦郡呼子町

さて、このような経過を経て、「オリ・オロ」が、東北地方北部、一部で北海道渡島半島において「ホロ」と呼ばれているのである。先にふれたように、「ホロ」と「ホラ」の類似性が乏しいのに対し、「ホロ」は「オリ・オロ」との類似性ははるかに高い。この点を納得されるよう、できるだけ類例を示しておきたい。

- ④母衣月（ホロツキ）北海道後志支庁寿都町
- 母衣月（ホロツキ）青森県東津軽郡今別町
- オリツキ 高知県安芸市
- 下付（オリツキ）愛媛県宇摩郡新宮村
- 折付（オリツキ）熊本県球磨郡湯前町

- ②母衣懸（ホロガケ） 青森県青森市小柳
折 掛（オリカケ） 愛媛県周桑郡小松町石鎚
- ③母衣野（ホロノ） 岩手県下閉伊郡岩泉町
鬼籠野（オロノ） 徳島県名西郡神山町
折 野（オリノ） 徳島県鳴門市
- ④保呂瀬沢（ホロセ） 秋田県南秋田郡五城目町
折 瀬（オリセ） 山口県厚狭郡山陽町
- ⑤母衣地（ホロチ） 岩手県下閉伊郡新里村
落 地（オロチ） 兵庫県赤穂郡上郡町
- ⑥母衣下山（ホロシ） 岩手県気仙郡住田町
折瀬崎（オロシ） 長崎県（前出）
- ⑦ホロキ長根 青森県八戸市湊町
保呂毛（ホロケ） 宮城県本吉郡志津川町
折 木（オリキ） 長崎県南高来郡北有馬町

以上の如く、極めて類似性が高く、しかも地形的にもほぼ合致するのである。先にも述べたように、「ホロ」にはアイヌ語地名も混入していると考えられ、今ここで、すべての「ホロ」を解釈しようとは思わないが、「ホロ」の多くは、「オリ→オロ→ホロ」の変化が基本であって、土地がけずり落されて崖を伴う地形の名称と考えたい。ただ、鏡味完二の言うように、一・二の例で、「ホラ→ホロ」もあり得ようが、基本的には「ホラ・ボラ（洞）」とは無関係とすべきであろう。

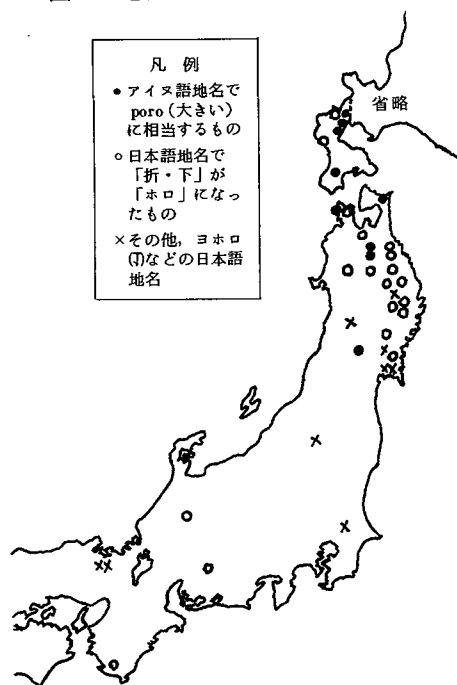
最後に、アイヌ語地名としての「ホロ」の場合を若干ふれておきたい。これについては、山田秀三によって³²⁾、次の地名がアイヌ語地名ではあるまいかとしている。

- ①母衣部（ホロベ） 青森県下北郡東通村
②母衣内（ホロナイ） 青森県東津軽郡小泊村
③幌 内（ホロナイ） 青森県上北郡十和田町

④保呂内（ホロナイ） 宮城県玉造郡鳴子町

①については、poro-pet（大きい川）で、「ホロベツ」とすべきところを、語尾が約されて、「ホロベ」となったという考え方である。この河川は比較的低平な地を流れており、日本語の「ホロ」という崖地には当たらないから、論者もアイヌ語地名と考えたい。次の②～④の「ホロナイ」は、いずれも谷沢に当り、崖地にも関係するのであるが、地名の用法や分布、更に地形的にも poro-nai（大きい沢）に該当するようで、これもアイヌ語地名と解したい。これ以外の「ホロ」については、東北地方の場合は日本語地名と解し、北海道渡島半島においては、

図4 地名「ホロ」の分布



母衣月（ホロツキ）・幌島（ホロシマ）＜桧山支庁大成町＞が日本語地名、他の「ホロベツ・ホロナイ」はすべてアイヌ語地名としたい。

以上によって、日本列島にある「ホロ」を図4に分類してみた。この中には、京都府舞鶴市の「与保呂（ヨホロ）」の「ホロ」もあり、これは人夫の住地、「丁（ヨホロ・ヨウロ）」であろう。この他、東北の保呂羽神社の「ホロ」も×印で示しており、なお今後の整理も必要であろうことを念じつつ本稿の終りとしたい。

（注）北海道渡島半島以東は、鏡味完二氏『日本の地名』p-50にあるように、すべて、アイヌ語地名のため省略した。

(注)

- 1) 鏡味完二(1958)：日本地名学・地図篇 p-105
- 2) 前掲1) p-105
- 3) 鏡味完二(1964)：日本地名小辞典 日本の地名 角川書店
- 4) 柳田国男(1963)：地名の研究 ナル・ナロの項 古今書院
- 5) 松尾俊郎(1976)：日本の地名 新人物往来社 p-98~99
- 6) 大野 晋(1974)：日本語をさかのぼる 岩波書店 p-25
- 7) 神宮司庁(1976)：古事類苑 地部一 吉川弘文館 p-1276~1277
- 8) 前掲4)の垣内と谷地の項
- 9) 拙稿(1978)：古地名からみたノとハラの諸問題 東アジアの古代文化 16号
大和書房 <投稿中>
- 10) 前掲7)のp-1274
- 11) 金沢庄三郎(1938)：日鮮同祖論(本稿では「東アジアの古代文化・13号」の資料発掘 p-117~118によった)
- 12) 前掲4)の地名の研究の項
- 13) 鏡味完二(1964)：日本の地名 角川書店 P-51~52
- 14) 山口恵一郎(1974)：地名の由来 地図と地名 古今書院 P-42
- 15) 日本地誌研究所(1976)：日本地誌20巻 二宮書店 p-291
- 16) 金思燁(1977)：肥の国地名にみられる高句麗的特色 東アジアの古代文化 13号
p-37~38
- 17) 前掲9) <投稿中>
- 18) 折茂順平(1950)：壱岐島の触集落 社会地理 24
- 19) 浮田典良(1972)：壱岐の集落と触 地形図に歴史を読む 第四集 p-92
- 20) 新村出編(1976)：広辞苑 第二版 p-1968
- 21) 山口恵一郎篇(1976)：日本図誌大系 九州Ⅰ 朝倉書店 p-290
- 22) 前掲16) p-38~39
- 23) 竹内理三篇(1976)：荘園分布図 下巻 吉川弘文館
- 24) 開墾をさすハリ・ハルに、原を用いることや、九州のハルタ(原田)が「墾田」をさすことは、すでに松尾俊郎氏が、前掲5)のp-44で示されている。しかし、氏の「原」の概念が私の場合と異っており、しかも氏は九州方面では原をハル・バルと呼ぶのが一般という前提に立ておられる。この点、私の場合は、九州ではもともと原をハルと呼ばなかったという前提から出発しており、決して松尾氏の業績を無視していないことを理解していただきたい。

- 25) 前掲13) p - 49
- 26) 前掲 5) p - 167
- 27) 金田一京助(1960):アイヌ語研究 金田一京助選集Ⅰ 三省堂 p - 403
- 28) 山田秀三(1957):東北と北海道のアイヌ語地名考 楡書房 p - 74 ~ 81
- 29) 前掲13) p - 49
- 30) 鏡味明克(1974):地名の言語学的諸問題と展望 地図と地名 古今書院
p - 62 ~ 63
- 31) 前掲 5) p - 162
- 32) 前掲28) p - 80 ~ 81